広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第37号　2009．3〉

教育実習の評価のあり方の改善について（２）

― 授業評価シートの効果的な活用を目指して ―

富永　和宏　　青谷　章弘　　井上　芳文　　喜田　英昭
河野　芳文　　佐々木靖彦　　砂原　　徹　　橋本　三嗣
森脇　政泰　　今岡　光範　　小山　正孝　　下村　　哲

１．はじめに

今年度（平成20年度）の広島大学の中・高等学校教育実習Ｉは，教育学部のカリキュラムの変更による移行措置で，従来とは異なり，６月，９月と10月の三期にそれぞれ２週間ずつ行われた。

また，少し先のことではあるが，平成22年度学部入学生からは，新設科目の教職実践演習が第４年次後期に実施されることになっている。この演習は，平成18年７月に出された中央教育審議会教員養成部会の答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」[1] で提唱されたように，教員として最小限必要な資質や能力が身についていることを最終的に確認するためのものであり，教員養成のまとめとして位置づけられる。

この教職実践演習の導入により，教育実習の位置づけも，教員養成課程の仕上げというよりは教職への適性や自らの進路を考える過程としての色合いが強くなった。すなわち，教員を目指す学生にとっては，教育実習の中で発見した自己の課題について反省や考察を深め，教職実践演習で解決するように努めることで，教員として求められる資質や能力を身につけることができるように教職課程が発展・充実されたのである。

したがって，教職実践演習を実のあるものにするためには，教育実習において各実習生の課題を明確にし，実習校と大学，また実習校間で情報の共有化を進め，連携して指導にあたることが必要である。

この点からも教育実習における評価のあり方は非常に重要な問題といえる。教員として求められる教育に対する意欲や責任感，教科に関する知識や指導技術及び社会性やコミュニケーション能力などについて，それぞれの実習生がどのような状況にあるのかを，正確にまた詳しく評価することが求められている。[2]

この教育実習の評価のあり方の改善のために，昨年度（平成19年度），広島大学附属中・高等学校（以下，本校）の数学科と広島大学教育学部・教育学研究科のスタッフによるプロジェクトチームは，実習生の授業実践の観点別評価をより充実させるための方策として授業評価シートの開発に取り組んだ。その成果として，授業実践の準備から実施に至るまでの内容について21個の評価項目を設け，各項目について評定することで，多面的で分析的な評価を行うことができるようになった。[3]

今年度，我々はその研究をさらに進め，評価シートの効果的な活用を目指すことにした。特に，評価を授業者へフィードバックし，実習生が自己の課題に対して理解を深め，次回の授業でその課題を解決するように努めることで，授業に対する計画力や実践力を高めるサイクルを補強することに研究の重点をおいた。

このサイクルは，これまでの教育実習でも批評会における課題の指摘と評価，さらに指摘された課題をふまえての授業計画の練り上げの行程の中に存在していた。しかし，評価シートを活用して全般的に網羅された観点別の評価を授業者に示すことで，実習生が自分の課題を幅広く，そして詳しく把握できることは，実習授業に対する計画力や実践力をより一層高めることにつながると考えられる。

２．研究の目的・方法

（１）研究の目的

１．で述べたように，本研究の目的は授業評価シートの作成と効果的な活用のあり方を明らかにし，実習授業に対する計画力や実践力を高めるサイクルを補強することである。

Kazuhiro Tominaga, Akihiro Aotani, Yoshifumi Inoue, Hideaki Kida,Yoshifumi Kohno,Yasuhiko Sasaki, Toru Sunahara, Mitsugu Hashimoto,Masayasu Moriwaki, Mitsunori Imaoka, Masataka Koyama, Tetsu Shimomura
A Study on Teacher Training for Mathematics Education（2）― For An Effective Use of Instruction Assessment Sheet ―

教育実習における従来の評価では，指導にあたる教員が，自分の経験や指導観などに照らし合わせながら，指導が必要と思われる部分について独自の方法による記述形式で記録をとっていた。それを，それぞれの観点について評点を与える授業評価シートを用いれば，授業実践に求められる観点を全般的に網羅し，授業を様々な観点から詳細に分析することで，より的確に実習の達成状況を把握できるようになる。

その結果得られたデータは次のような利用法が考えられる。1つは，評価のデータを実習生にフィードバックすることで，授業実践における課題をより正確に詳しく把握させ，実習授業に対する計画力や実践力を高めることである。すなわち「指導と評価の一体化」を目指す方向である。[3)]

他の利用法として，観点ごとに評点として与えられたデータを数値化して，教育実習の成績評定を決定する際の資料として利用することも考えられる。昨年度の研究から，各観点に与えられた評点には客観性があると判断できたことから，このデータを資料とした評定にも客観性や信頼性があると考えられ，的確な評価につながることは大きな利点であろう。

このような授業評価シートの活用法に関して，今回の研究では「指導と評価の一体化」を目指す方法について取り組むことにする。データを資料とした評定も研究するに値すると考えるが，教育実習の充実，発展を考える立場から，まずはこの方を優先すべきであると考えるからである。

特に今回の研究では，授業評価シートの効果的な活用のあり方として，実習生どうしで授業実践の相互評価を行わせ，お互いを高めるような取り組みを促すことを重点的に扱う。十分な指導観や指導スキルが身についていない実習生どうしが評価することの難しさは十分予想できるが，授業評価シートを用いて評価することで，これまで以上に実習生が多面的な視点をもつことができれば，授業計画や実施の際に自己点検がより詳しくかつ深くなり，実習授業に対する計画力や実践力を高めることにつながると考える。

（2）研究の方法

昨年開発した授業評価シートは，指導教員が授業の達成状況を詳細に評価するために，細かく評価項目を設けていたが，実習生が使用するにはシートの内容や形式をより使いやすいものに直す必要がある。さらに，記入した授業評価シートをどのように扱えばより高い教育効果が得られるのかを考えることも重要である。

これらのことを考慮に入れて，具体的には次のような取り組みを行った。

①授業評価シートの作成

実習生どうしが使用するので，名称を「授業評価シート」とし，評価項目の内容や評定の段階数などを変更して使いやすいシートにする。変更したシートを実際に使い，アンケート等で感想，意見を聞き，さらに使いやすいものに修正する。

実際，実習授業の観察時には実習生は授業観察録もつけねばならず，授業評価シートを記入するのに手間がかかるのは大きな負担である。この点を考慮して授業評価シートをスリム化することが必要不可欠である。

また，この授業評価シートの各観点における評価はＡ～Ｄの４段階評定で行うことにした。昨年度開発した授業評価シートの評価は，教育実習の成績評定とリンクさせることも視野に入れて10段階評定であったが，授業評価シートは実習生どうしが評価するものであり，10段階では評価が細かすぎて違いが分かりにくくなることや，３段階や５段階では評価が真ん中の評定に集中してしまう恐れがあることを考慮に入れたものである。

これらのことをふまえて本校の数学科のスタッフで評価シートの内容について検討，整理を行った。その結果作成されたものが**図１**の授業評価シートである。

教育実習　授業評価シート
___月___日（　）___限 クラス（　　）科目（　　）授業（　　）観察（　　）

1．授業の構成・準備	評価	コメント
授業の構成は適切であるか。		
授業の目標は適切であるか。		
評価の観点は適切であるか。		
扱う教材は十分焦点化されているか。		
指導上の留意点や指導の工夫は適切に計画しているか。		
時間配分の計画は適切であるか。		
2．授業の実施	**評価**	**コメント**
説明の内容や指示は明確に示されているか。		
授業における説明の内容は的確であるか。（曖昧でない、誤りを含まない）		
発問は生徒の考えを引き出すよう工夫されているか。		
板書の内容は適切であったか。（板書の構成、色チョークの使い方など）		
時間配分は適切であるか。		
まとめの内容は適切であるか。		
生徒の活動は十分に保障されているか。		
生徒の理解の状況を適切に把握しているか。		
授業の目標は実現できたか。		
3．生徒の反応	**評価**	**コメント**
意欲を持って学習に取り組んでいたか。		
学習内容を理解できていたか。		

図１　授業評価シート

②授業評価シートの使用のあり方についての考察

今回，授業評価シートは，授業の観察にあたった実習生がそれぞれ記入したものを批評会に持ち寄り，授業観察録とともに批評会の資料として活用した。さらに批評会後は授業評価シートをまとめて授業の実践者に渡し，授業者はそれぞれの観察者から寄せられたシートの内容を確認した後に指導にあたる教員に提出するという流れで使用した。

この流れで授業評価シートを使用すれば，授業観察

にあたる実習生は，授業評価シートに網羅された評価項目について詳しく授業を観察し，幅広く授業内容を検討，評価できる。さらに，その結果を批評会で発表し合うことで互いに観察内容を深めることができる。また，授業者は，各評価項目について評定やコメントがあるので，批評会で意見として述べられなかった点についても，情報を受け取ることができ，自分の授業実践の課題をより詳しく把握することができる。そして，指導にあたる教員も，批評会で出された意見や観察録に加えて，実習生の授業観察の状況を知る資料として利用できると考えた。

この授業評価シートの使用のあり方について実習後にアンケート等で感想，意見を聞き，課題を明らかにするとともに，それを受けて使用のあり方の改善策について数学科のスタッフ全員で検討，整理を行った。

３．研究の実際と考察

（１）授業評価シートを利用した相互評価の試みと実習生の反応

６月期の教育実習では，前年度作成した実習指導評価シートを用いて実習生どうしによる相互評価を試験的に行い，それに対する意見や感想を聞き取り，成果と問題点を確認した。その結果をふまえて授業評価シートを作成し，そのシートを用いて９月期，10月期の教育実習で実習生どうしによる相互評価を行った。

また，10月期の実習生のうち教育実習Ｉを履修している20名は事後指導の時間があったので，それを利用してアンケートを実施して，実習生どうしによる相互評価や授業評価シートの使用のあり方についての成果と問題点を調査した。

そのアンケートの結果は右の**表１**の通りである。また，各設問に対して以下のようなコメントが寄せられている。

設問１．授業評価シートは授業の準備を行う上で役に立ちましたか。

○自分の行った授業を振り返るのに役立った
○批評会で言われなかった意見も見ることができた
○授業を計画するとき，何に気をつけるべきかの規準になった
○批評会で見た後すぐに指導の先生に提出したので準備のときに手元に無かった

設問２．授業評価シートは授業の実践を行う上で役に立ちましたか。

○客観的な意見が寄せられていたので役立った
○自分のできがはっきりランクで示されるのでよくわかったのがよかった
○指摘されたことを直すよう気をつけることができたのでよかった

設問３．授業評価シートは授業の観察や評価を行う上で役に立ちましたか。

○観察を行う際にどういう点に着目すればよいかわかったのでよかった
○評定でＣやＤをつけるのには抵抗がある
○評価項目が気になって自由に観察できなかった

設問４．授業評価シートは批評会に参加する上で役に立ちましたか。

○どういう点を評価したのか参考になった
○メモを取り損ねたときも，後からコメントを読めたのはありがたかった
○批評するポイントの置き場がわかった
○観察録の内容とほぼ重なるので一つあれば十分
○批評会までに授業評価シートを書き上げる時間的な余裕が無いときもあった

設問５．授業評価シートの各項目に評価を与えることは難しかったですか。

○評価の基準がはっきりつかめていないので難しい
○評定でＣやＤをつけるのは気を遣うので，ほとんどＡにしてしまった
○評価すべき項目が多く，コメントを書くのが大変だった
○評価の項目が多すぎて記入するのに時間がかかる
○評価の項目の設定が細かすぎてよくわからない
○評価項目の設定はもっと詳細なものにしないと，きちんと評価できない

また，授業評価シートに対する意見や感想を自由記述で求めた設問に対しては，次のように肯定的なものや課題を指摘するもの，また疑問に思うことや授業評価シートに対する提案など色々な回答が寄せられた。

表１　授業評価シートに関するアンケート結果

	Ａ	Ｂ	Ｃ	Ｄ
授業評価シートは授業の準備を行う上で役に立ちましたか	３人（15％）	11人（55％）	４人（20％）	２人（10％）
授業評価シートは授業の実践を行う上で役に立ちましたか	３人（15％）	10人（50％）	５人（25％）	２人（10％）
授業評価シートは授業の観察や評価を行う上で役に立ちましたか	２人（10％）	10人（50％）	６人（30％）	２人（10％）
授業評価シートは批評会に参加する上で役に立ちましたか	２人（10％）	９人（45％）	７人（35％）	２人（10％）
授業評価シートの各項目に評価を与えることは難しかったですか	５人（25％）	９人（45％）	４人（20％）	２人（10％）

Ａ：そう思う　Ｂ：ややそう思う
Ｃ：あまりそう思わない　Ｄ：そう思わない

（肯定的な回答）

○批評会の後に評価シートをもらうことで，自分は何ができていなかったのかを再確認することができた

○他の人から見た自分の授業の評価は参考になる

○自分では気がつかないこともシートのおかげで観察することができた

○授業の準備や実践について詳しく評価できる

○評価項目がまとめてあるのでわかりやすい

○批評会で言えないことも伝えることができる

○良い点もコメントしてくれているので励みになる

（課題を指摘した回答）

○授業観察中に観察録と両方をつけるのはとても忙しくて難しかった

○授業評価シートをつけるのは時間がかかるのに，授業観察が続くときなどは時間的な余裕が無くて大変だった

○授業を観察したり批評会で議論するには観察録があれば十分である

○評価項目が沢山で，書くことが多過ぎる

○生徒の理解の状況は観察していてもわかりづらい

○評価の基準がわからないので，評定がつけづらい

○悪い評定をつけるのに気を遣う

○次の授業の準備に向けて，みんなからもらった授業評価シートを手元に置いておきたかった

（疑問を提示した回答）

○授業の構成，準備に関する項目は，担当の先生に指導を受けるのでほとんどＡをつけるしかないのに，本当に評価シートに必要なのか？

（授業評価シートに対する提案）

○観察録と両方つけるのは負担が大きく，時間的にも余裕がないので，観察録と一体型でまとめやすいものにしたらいいと思います

○授業者から「今日の授業ではこの観点に力を入れて準備した」というように，授業の前に説明があってもよいのではないだろうか

右に示す**表２**は，ある同じ授業を観察した実習生が各評価項目でどのように評定をつけたかをまとめた資料であり，実習生が各評価項目につける評定のばらつき具合を見ることができる。なるべく多くのデータ数を取るために，７人が観察した９月期の実習授業（10月１日に中学１年Ｂ組で実施）を対象に取り上げた。

無論，評定の分布は授業を実施した学年やクラスによって変化するし，授業のポイントの置きどころによっても違ってくるはずである。しかしながら，他の授業についても観察者の評定の分布の状況を調べた結果，共通する傾向として次の３点が挙がった。

①全般的にＡやＢといった高めの評定をつけやすい

②授業実践において課題があると思われる観点について評定がわかれやすい

③授業実践において課題がある場合，関連するいくつかの観点について評定がわかれやすい

これらの傾向については，アンケート結果など他の資料と合わせて，後で考察を加えていく。

表２　ある授業に対する各項目の評定の分布

1．授業の構成・準備	A	B	C	D
授業の構成は適切であるか	6	1	0	0
授業の目標は適切であるか	6	1	0	0
評価の観点は適切であるか	5	2	0	0
扱う教材は十分焦点化されているか	5	2	0	0
指導上の留意点や指導の工夫は適切に計画しているか	4	3	0	0
時間配分の計画は適切であるか	0	4	3	0
2．授業の実施				
説明の内容や指示は明確に示されているか	6	1	0	0
授業における説明の内容は的確であるか	3	4	0	0
発問は生徒の考えを引き出すよう工夫されているか	6	1	0	0
板書の内容は適切であったか	4	2	1	0
時間配分は適切であるか	1	3	3	0
まとめの内容は適切であるか	3	2	2	0
生徒の活動は十分に保障されているか	5	2	0	0
生徒の理解の状況を適切に把握しているか	2	5	0	0
授業の目標は実現できたか	4	2	1	0
3．生徒の反応				
意欲を持って学習に取り組んでいたか	6	1	0	0
学習内容を理解できていたか	5	2	0	0
合　　計	71	38	10	0

（２）研究の成果と課題および考察

（１）でも述べたように，改良された授業評価シートを用いて，９月期，10月期の教育実習において，実習生どうしで授業実践に対する相互評価を行う試みを実施した。この試みにおいて回収した授業評価シートの内容やアンケートの回答などを検討した結果から，本研究における成果として，実習生が授業の実践を評価するための使いやすい授業評価シートを作成したことにより，その評価シートが実習生の授業実践に対する観察や評価を行うのに役立ち，それが次回の授業における計画力や実践力の向上につながったと考えられることから，授業評価シートを活用する意義を示せたことが挙げられる。

その一方で，授業評価シートと実習観察録の両方を一緒につけることは難しいことなど，授業評価シートを効果的に活用するための方策について，いくつかの課題が指摘されている。

授業評価シートの作成に関しては，前年度の研究で開発された実習指導評価シートを６月期の実習で試験的に使ってみたが，評定をつける手間の大変さや評価する観点のねらいがよくわからないなど，実習生が使うには問題点があるという意見が寄せられた。

この問題点について検討を行い，評価項目を整理するなどして17個の観点にまとめた授業評価シートを作成した。この授業評価シートを９月期，10月期の教育実習において使用し，評価シートの項目についてアンケートをとったところ,「設定が細かすぎる」とか「項目が多すぎて書くのが大変」という意見も寄せられたが，多くの実習生は「これでよいと思う」,「特になし」という回答であり，授業評価シートの内容については概ね受け入れられていると判断できる。

さらに,「評価項目がまとめてあるのでわかりやすい」,「授業の準備や実践について詳しく評価できる」,「観察を行う際にどういう点に着目すればよいかわかったのでよかった」など，授業評価シートの利用価値を認めた感想も寄せられていることを考えれば，授業評価シートを利用する意義は認められたといえる。

ただし，先にも述べたように，授業を観察しながら実習観察録と授業評価シートの両方をつけることは大変な作業である。その結果，かなりの実習生が，授業後に実習観察録の内容を整理するときに併せて，取ったメモを元に授業評価シートに記入している。これが「実習観察録と授業評価シートは同じ内容なのだから一つでよい」という意見が寄せられる背景となっていると考えられる。

この課題に対する方策としては，アンケートでも提案されていたように，**図２**のような実習観察録と授業評価シートをまとめたものを利用することが考えられる。そうすれば授業を観察するときに，評価シートにあるように詳しく分けられた観点にもとづいて授業を多面的に観察でき，その内容を落ち着いて観察録に記入することができるだろう。

ただし，実習観察録と授業評価シートをまとめてしまうと，それぞれの観察者がつけた評価シートを批評会後に授業者に渡すという流れで動くことが難しくなる。アンケートの回答にも「次の授業の準備に向けて，みんなからもらった授業評価シートを手元に置いておきたかった」,「メモを取り損ねたときも，後からコメントを読めたのはありがたかった」とあるように，批評会後に授業評価シートを授業者に集約することは，授業者が授業の内容を振り返り次回に取り組む際に役立つと考えられる。したがって，実習生どうしの相互評価を行うことで授業への計画力や実践力を高める取り組みを進める上で，授業評価シートを授業者に集約することは必要と思われる。

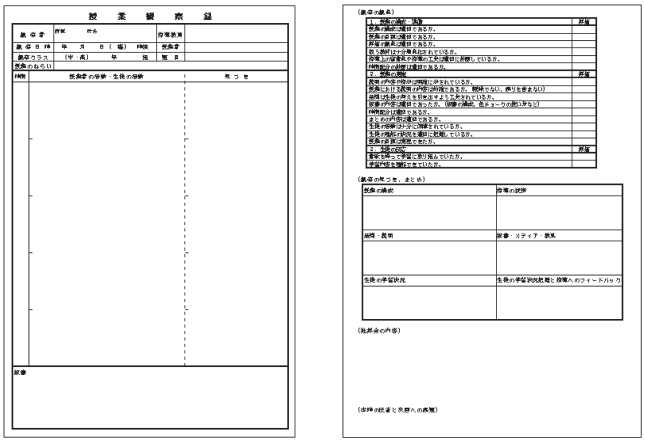

図２　新 実習観察録（案）

なお，実習生から評価シートの項目について寄せられた疑問として「授業の構成，準備に関する項目は，担当の先生に指導を受けるのでほとんどAをつけるしかないのに，本当に評価シートに必要なのか？」というものがあったが，授業評価シートが実習授業の計画および実践のために大切な観点を網羅することで，授業の準備段階において自己点検を促すためのものでもあることを考えれば，授業の構成，準備に関する項目が必要なことは明らかである。

次に，授業評価シートを効果的に活用するための方策について考察を進める。今回の授業評価シートを活用して実習生どうしで相互評価を行う試みに対して，実習後に寄せられた感想，意見を整理すると,「批評会の後に評価シートをもらうことで，自分は何ができていなかったのかを再確認することができた」,「批評会で言われなかった意見も見ることができた」,「批評会で言えないことも伝えることができる」など，批評会を補完する存在として授業評価シートの価値を認めるものや,「評価項目がまとめてあるのでわかりやすい」,「自分では気がつかないこともシートのおかげで観察することができた」など，授業観察の観点を詳しく網羅して示したものとしての価値を認めるものが多かった。また,「良い点もコメントしてくれているので励みになる」というように，情意面でも授業評価シートが有用であることを指摘した意見もある。

さらに，アンケートで「授業評価シートが役に立ったか」という設問に対し,「そう思う」あるいは「ややそう思う」とする回答が，授業の準備や実践に対して65～70％もあることから，多くの実習生は授業評価シートが次回の授業の準備や実践に対して有用であることを認めていると言える。

これまで挙げてきた意見や感想，またアンケートの結果から伺えるように，授業評価シートは，批評会における課題の指摘と評価，さらに指摘された課題をふまえての授業計画の練り上げの行程を補強するのに有効にはたらいていると考えられる。それにより実習生が自分自身のもつ課題に対して理解を深め，次回の授業でその課題を解消するように努めることは，実習授

業に対する計画力や実践力を高めるＰＤＣＡのサイクルがよりよく進められると判断できる。

しかし，その一方で「授業評価シートは授業の観察や評価を行う上で役に立ちましたか」や「授業評価シートは批評会に参加する上で役に立ちましたか」という設問に対しては，40～45％の実習生が「あまりそう思わない」または「そう思わない」と回答している。寄せられたコメントも「評価の基準がわからないので評定がつけづらい」，「次の授業の準備に向けて，みんなからもらった授業評価シートを手元に置いておきたかった」，「悪い評定をつけるのに気を遣う」など授業評価シートの活用のあり方に対する課題を指摘するものも少なくはない。

また，今回の試みについて本校の数学科のスタッフで検討した際にも「批評会を受けて前回の内容をどのように反省し，その結果として次回の授業のどの部分にどのような形で反省を活かそうとしているのか，というところを示すものがあった方がよい」という意見も出されるなど，授業評価シートを効果的に活用するために改善できるところはまだまだあるといえる。

特に，アンケートの設問「授業評価シートの各項目に評価を与えることは難しかったですか」に対して，「そう思う」，「ややそう思う」と回答した実習生は70％もいることなど，観点ごとに評定をつける部分で苦労している実習生は少なくない。**表２**で示されているように，観点によってもばらつきはあるが，全体としてはＡまたはＢという評定が90.8％も占めている。高い評定が多いこと自体は問題ではないが，アンケートのコメントにもあったように，この評定の中には共に教育実習を受けている仲間に対する気遣いや遠慮によるものも含まれていると思われる。また，他のコメントにもあるように，評価の基準がわからないのでうまく評定がつけられないといった課題も存在する。

この課題に対しては，批評会において指導にあたる教員が，自分がつけた授業評価シートの内容を批評会の参加者に示したり，観点に対する評価基準を説明するなど，これまで以上に観察や評価のスキルの向上に向けた指導を行う必要があろう。

４．今後の課題と展望

本研究で，実習生が授業実践を評価するための使いやすい授業評価シートを作成したことや，そのシートを利用して授業実践に対する観察や評価の力を高め，実習授業における計画力や実践力の向上に役立てたことは成果である。

しかし，実習生にとって，実習観察録と授業評価シートの両方を記録するのは時間的にも労力的にも大変であることや，観点ごとに評定をつけるのが簡単でないことなど，シートを利用することで加わる実習生の負担は軽くはない。内容を整理したり評価の仕方を工夫するなど，授業評価シートの活用のあり方について，実習生の負担を軽減しつつ成果を維持できるように，さらなる検討を重ねていくことは今後の大きな課題である。

さらに，今後取り組むべき課題としては，教育実習における達成状況を正確にまた詳しく評価し，教員として求められる資質や能力について各実習生がもつ課題を明確にすることが挙げられる[4)]。これは**１．**で取り上げた教職実践演習を実のあるものにするために重要な課題である。

加えて，各実習生がもつ課題について，大学や他の附属学校と連携をとりながら指導にあたることができる体制づくりも大切な課題である。そのためには情報の共有は必要不可欠である。具体的には，カルテのようなものを作成して，各実習生の達成状況や抱える課題とその改善状況などについて，わかりやすい形で記録をまとめておくのがよいと思われる。

今後の展望として，このようなカルテを各附属学校と大学間で共有し，そこに記載されている情報を有機的に活用することを考えたい。そうすれば，新設の教職実践演習だけでなく，現在２週間ずつ別々の附属学校で行われる教育実習においても，実習生の教員として求められる資質や能力の育成に向けて，さらに効果的な指導を行うことができると思われる。そのためにも，教育実習における評価の改善のあり方について，今後も研究を進めたいと考えている。

引用・参考文献

１）中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」，Ⅱ節１－（３）「教育実習の改善・充実」，2006

２）加澤恒雄 他，『21世紀における新しい教育実習の探求』，pp. 70－76，学術図書出版社，2005

３）富永和宏 他，「教育実習の評価のあり方の改善について」，『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』，第36号，pp. 51－58，2008

４）有本昌弘，『教員評価・人事考課のための授業観察国際指標』，pp. 84－96，学文社，2006